

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：17401

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A））

研究期間：2019～2021

課題番号：18KK0365

研究課題名（和文）アルフレート・シュッツの言語観とその形成史に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Alfred Schutz's View of Language and its Formative History

研究代表者

多田 光宏（Tada, Mitsuhiro）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・准教授

研究者番号：20632714

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

渡航期間： 11ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究では、現象学的社会学の創始者アルフレート・シュッツの言語観の社会背景について、彼の同化ユダヤ人としての側面に着目して調査を進めた。特に明らかとなったのは、多民族国家オーストリア＝ハンガリー帝国において、言語的にも主観的にもドイツ人（国家国民）であった同化ユダヤ人が、第一次大戦後の新生オーストリア（ドイツ人の国民国家）の疑似科学的人種イデオロギーにより、異人種類型としてそのメンバーシップから排除されたことが、言語習得を通じた市民化というシュッツの言語論のみならず、彼の主観主義と類型化論の生活世界的基底をなしている可能性である。本成果は国際学会ならびに海外大学で計3回の講演により発表された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

昨今のグローバル化にともない移民や難民が増大しているが、従来の社会学理論は、二度の世界大戦とその後の冷戦、ならびに経済的繁栄のもとで自明になった国民国家の枠組に囚われがちであり（社会の境界を国境と同一視する方法論的ナショナリズム）、行為者たちのメンバーシップと言語の共通性が前提で、現状の世界社会の分析に適さなくなっている。本研究は、それらが前提ではない時代と地域を生きたシュッツについて、その学術的作業の社会的背景に着目することで、彼の現象学を脱・方法論的ナショナリズム化し、行為者にとってメンバーシップや言語がいかなる意味をもって現れるかを問う、現代社会分析のための理論的基盤を再整備した。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the socio-historical background that shaped the linguistic views of Alfred Schutz, the founder of phenomenological sociology, by focusing on him being an assimilated Jew. The assimilated Jews, who were linguistically and subjectively German (state nation) in the multinational Austro-Hungarian Empire, were excluded from obtaining the membership to the new Austria (German nation-state) as another racial type after World War I by the pseudo-scientific racial ideology. This study reveals that this situation could have become the life-worldly foundation of Schutz's linguistic theory of citizenship through language acquisition, and of his subjectivism and typology. The results of this study were presented at an international conference and at two universities abroad.

研究分野：社会学

キーワード：アルフレート・シュッツ 言語ナショナリズム オーストリア＝ハンガリー帝国 同化ユダヤ人 人種イデオロギー 現象学的社会学 メンバーシップ 主観主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

昨今のグローバル化にともない、移民や難民を含めて国際移動と現地定住をする人の数が世界的に増大しているが、従来の社会学理論は、二度の世界大戦とその後の冷戦、ならびに経済的繁栄のもとで自明になった国民国家の枠組に囚われがちであった。社会の境界を国境と同一視するいわゆる方法論的ナショナリズムであり、この枠組のもとでは往々にして行為者たちのメンバーシップと言語の共通性は自明の前提とされるため、いま述べたような現状の世界社会の分析には適さなくなっている。

本研究は、研究代表者がこうした問題意識のもとで社会学史上の代表的な理論家たちの言語観について進めている科研費（基課題）研究（研究課題番号 16K04035; 19H01564）より派生するものであり、とくに現象学的社会学の創始者であるアルフレート・シュッツの言語観、ならびにそれが形成された社会史的背景を明らかにしようとするものである。従来、シュッツの言語論についての議論は、もっぱら理論的観点からなされるにとどまっておき、彼が多言語・多民族国家ハプスブルク帝国（オーストリア＝ハンガリー帝国）から新生オーストリア（ドイツ人の国民国家オーストリア）へという複雑な移住の時代と地域を生きたとある事実、ならびにそれが彼の言語観の形成に与えた影響は、無視されてきた。これは、科学的作業における生活世界的基礎を明らかにするというシュッツ理論の実践という点でも埋めるべきピースであり、また、上述のとおり理論研究の状況からも、国民国家の枠組が当たり前ではない時代に形成された社会学理論を、当時の社会背景を踏まえて再考する必要があると考えた。

さらに本テーマについては、本研究課題申請の直前に在外研究で受け入れていただいたドイツ・ベルリン工科大学のフーバート・クノーブラオホ教授（現象学的社会学と言語社会学の第一人者にして、シュッツの孫弟子、かつトーマス・ルックマンの弟子）からも協力と助言が仰げるといふ事情も加わり、以上により、課題そのものの学術的意義はもちろん、研究の進展も大いに見込めるものと考え、本研究を開始するに至った。

2. 研究の目的

上でも触れたとおり、本研究の目的は、現象学的社会学の創始者であるアルフレート・シュッツの言語観がいかなるものであり、またそれがいかなる社会史的背景のもとで形成されたかを明らかにしようとするものである。シュッツが、現象学の嚆矢エドムント・フッサールにならって、学問の基礎には生活世界があると指摘していたことはよく知られている。だがこれまでのところ、シュッツ現象学の基礎である彼自身の生活世界については、いくつかの伝記的著作、ならびに彼の知的交友関係に焦点を当てた、いわばマックス・シェーラー流の高踏的な知識社会学研究があるのみである。これに対し、シュッツが提案したような、日常生活世界に根ざした知識社会学研究を実践するためには、それをシュッツ自身に適用する必要がある。

本研究はそれを、とくに言語問題にスポットをあてておこなうものである。実際、彼が生まれて青年期まで存続したオーストリア＝ハンガリー帝国は、言語が民族問題と結びつき、ほとんど近代ナショナリズム（とくにエスノ言語ナショナリズム）の実験場のごとき様相を呈していた。この社会的事情が、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインをはじめとする当地の哲学者・思想家・文学者らに多大な影響を及ぼしたことはよく知られており、シュッツだけが例外的に、純粋に理論的文脈でのみ言語を論じたとは考えづらい。しかも彼は、オーストリア＝ハンガリー帝国のために志願して第一次世界大戦に従軍し、結果、その多言語帝国が各言語単位の諸々の小国民国家へと解体するという事態を体験している。この解体は、やや年長のヴィトゲンシュタイン（および同じ年生まれのアドルフ・ヒトラー）からちょうどシュッツの年代ま

での、多民族帝国時代に育った世代の思想形成に、甚大なるインパクトを与えたと言われており、その意味ではシュッツの言語思想の探究は、前近代的な多民族帝国から近代的な国民国家への転換が当時の人びとに与えた影響を明らかにするための、ひとつの質的調査（とくにドキュメント調査）に相当すると言うこともできる。そして、プレ国民国家時代を経験したシュッツの言語論とその形成史を解明することを通じて、ポスト国民国家時代の現代にふさわしい社会学理論を構築するための手掛かりを得ることも、本研究の目的の射程に含まれている。

3．研究の方法

本研究は、シュッツの学術的諸著作（生前未公開の草稿含む）に現れる、言語に関する諸記述（その少なからぬ部分は断片的な記述である）のテキスト分析を中心としつつ、彼に関するその他の私的・公的ドキュメント（他の研究者や家族との書簡、出生記録や渡米記録、アメリカでの国勢調査での回答など）さらには、オーストリア＝ハンガリー帝国の言語統計、同帝国解体時のサンジェルマン条約（独訳版含む）や新生オーストリアの関連公文書、ナショナリティの規定に関する当時の法学文献、また帝国解体後のナショナリティの選択権に関するウィーン・ユダヤ人共同体の声明文などから、言語とナショナリズムをめぐる当時の彼の生活世界的状況を明らかにし、またそれを彼の言語観の裏付けとして再構成するという手法を採った。また本研究は、そのテーマに鑑みて、関連する歴史学・言語学分野の先行研究に大いに依拠する学際的研究として遂行された。一般にシュッツの理論形成に関する研究は、彼に影響を与えたとされる哲学思想や経済学思想（その多くは彼の学的交友関係の範囲内である）への遡及にかぎられることがほとんどであるが、これに対し、ごく一部の社会的上層の閉鎖集団にすぎない当時の知的エリートたちの学的サークルのさらに外側の、過渡期オーストリアの具体的生活世界とその変貌こそをシュッツの社会学思想形成の根幹として、歴史学や言語学にも依拠して再構成しようとする本研究のアプローチは、管見のかぎりこれまで類例がなく、一見する以上はかなりオリジナルなものである。

4．研究成果

本研究を通じてとくに明らかとなったのは、多民族国家オーストリア＝ハンガリー帝国において、言語的にも主観的にもドイツ人（国家国民）であった同化ユダヤ人が、第一次世界大戦後の新生オーストリア（ドイツ人の国民国家）の疑似科学的な人種イデオロギーにより、異人種類型としてそのメンバーシップから排除されたことが、言語習得を通じた市民化というシュッツの言語論のみならず、彼の主観主義と類型化論という理論的支柱の、生活世界的基底をなしている可能性である。

研究開始前には、シュッツの同化ユダヤ人としての側面にはそこまで強い焦点を当てるべきとは想定していなかったが、研究の進展にともない、当地の同化ユダヤ人がオーストリア＝ハンガリー帝国から新生オーストリアへの移行という生活世界の激変のなかで被った社会的位置の変化が、彼のウィーン時代の生前唯一の著作である『社会的世界の意味構成 理解社会学序説』の端々に示唆されていることを発見し、それにより、言語（とくにドイツ語）が当地の同化ユダヤ人にとって有していた意味という観点から、社会的背景を踏まえつつ彼の言語論を再構成することとなった。重要なのは、当地のユダヤ人たちが、啓蒙の時代にその普遍的媒体としてのドイツ語の習得を通じてみずから西洋文明への同化を試みたこと、ドイツ語話者がドイツ人と見なされたこと（これが当初の「ゲルマン化」の意味であり、同化ユダヤ人は「モーゼの教えを信じるドイツ人」と見なされた）こと、そのドイツ人というのは民族集団とは別の

「国家国民」であったこと、また複雑な民族事情ゆえにオーストリア＝ハンガリー帝国における究極のナショナリティ規定の基準は当人の主観であったことである。シュッツが生きた多民族国家オーストリア＝ハンガリー帝国から国民国家オーストリアへの過渡期は、帝国期のナショナリティ規定の柔軟性が疑似客観主義の人種イデオロギーによって失われていく過程、つまりユダヤ人が、言語文化的同化の程度や当人のアイデンティティにかかわらず、生物学的に異なる人種類型（セム人）としてア priori に一律排除されていく過程であり、本研究は、シュッツの科学論がじつはちょうどこうした類型構成的な人種イデオロギーの疑似科学性を反省するものとして構成されていること、またシュッツの言語観が、ユダヤ人に対するそうした当時の排他的な社会背景のもと、言語を（オーストリア＝ハンガリー帝国時代と同じく）市民的生活世界への「よそ者」の同化を可能にする媒体として構想していることを、明らかにした。

世界的なコロナ・パンデミック等により、海外での資料収集をはじめ研究に大きな支障が出た面もあったものの、以上のとおり本研究は、従来のシュッツ研究がほぼまったく着目していなかった彼の社会学思想の生活世界的基礎を明らかにするとともに、またそれが、第二次世界大戦後の方法論的ナショナリズムに拠らないものであることから、ひるがえってシュッツ現象学への解釈をいわば根底から脱 - 方法論的ナショナリズム化し、行為者にとってメンバーシップや言語がいかなる意味をもって現れるかを問う、現代社会分析に適した理論構築のための基礎を整えたと言える。

なお以上の成果は、国際学会での発表1回、ならびに海外大学での招待講演2回を通じて発表され、また現在、論文が国際誌にて査読審査中である。

以上

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1 . 発表者名 Tada, Mitsuhiro
2 . 発表標題 The Meaning of Language for Alfred Schutz and his Lifeworld in Vienna From the Perspective of Assimilation and Othering of Viennese Jews
3 . 学会等名 Conference of The International Alfred Schutz Circle for Phenomenology and Interpretive Social Science (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Tada, Mitsuhiro
2 . 発表標題 Alfred Schuetz' Sprachsicht und ihr sozialer Hintergrund: Die Lebenswelttheorie des juedischen Soziologen auf ihn selbst angewendet
3 . 学会等名 the Workshop of the General Sociology, Institute of Sociology, Technical University of Berlin (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Tada, Mitsuhiro
2 . 発表標題 Alfred Schutz on Race, Language, and Subjectivity: A Viennese Jewish Sociologist ' s Lifeworld within Transition from Multinational Empire to Nation-State
3 . 学会等名 the Sociological Seminar, Faculty of Arts and Humanities, University of Passau (招待講演) (国際学会)
4 . 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	クノープラオホ フーバート (Knoblauch Hubert)	ベルリン工科大学・社会学研究所・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	ベルリン工科大学			
ドイツ	ベルリン工科大学			